

情報活用プロセスへの意識づけが、課題解決できる人材育成の鍵

東京学芸大学 教育学部 総合教育科学系 准教授

高橋 純 たかはし・じゅん

横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了後、富山大学大学院理工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。専門は、教育工学、教育方法学。富山大学人間発達科学部准教授などを経て、現職。文部科学省「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会・基本問題検討ワーキンググループ」委員等を歴任。共編著に『初等中等教育におけるICT活用』（ミネルヴァ書房）など。

東京学芸大学プロフィール

1949（昭和24）年、東京都内の旧制・師範学校を統合し、教育学部だけの国立単科大学として発足。現在は、5課程、1研究科を擁する。



様々なところで情報化・機械化が進む現代社会では、急激な変化が続いています。未来を生きる子どもたちは、そうした変化に対応し、主体的に行動していかななくてはなりません。そこで重要になるのが情報活用能力であり、その育成のポイントは2つあると、私は考えています。

1つは、情報と情報技術を適切に活用するための知識と技能の育成です。小学校の新学習指導要領の下ではプログラミング教育が必修化されますが、そうした学習はもちろん、キーボード操作や表計算ソフトなど、より基礎的な練習を積ませることも大切になります。もう1つは、①情報の収集、②収集した情報の整理・分析、③まとめ・表現といった問題解決・探究における情報活用プロセスの習得です。それらは、課題解決の基本的なプロセスでもあり、社会における汎用性があります。社会の変化によって生じた新たな課題と向き合い、自分で解決策を見つけるために、一層重要になるでしょう。小・

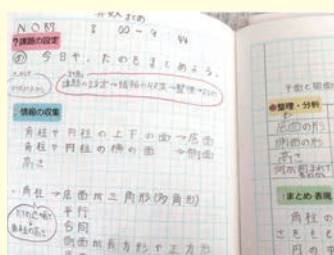
中学校の新学習指導要領では各教科に「学習過程」「探究の過程」が示されています。それは、情報活用プロセスの重視の表れだと、私は捉えています。また、子どもが情報活用プロセスを身につけてこそ、タブレットPCといったICT活用の効果も発揮され、情報活用能力が総合的に高まっていくのではないのでしょうか。

課題解決という壮大な取り組みをイメージしがちですが、実はどの教科・単元でも、子どもの情報活用プロセスへの意識づけは可能です。例えば、算数の約分の単元では、「約分の仕方」が課題であり、 $12/18$ の

約分では最大公約数の6で割るのが解決策です。ただ、2や3で割る例があってよく、子どもが様々な約分の例を効率性という観点で比較してみる活動など、情報を「整理・分析」する場を設けることが大切です。

情報活用プロセスは、情報技術よりも習得に時間がかかります。そこで、教育委員会には、全教科で適切な意識づけが図れるよう、教科合同での研修を促していただきたいと思っています。情報モラルやプログラミングはもちろん、情報活用プロセスも、近未来を担う人材にはしっかり身につけてほしいと願っています。

近未来への布石 情報活用プロセスの研修



高橋先生が指導する愛知県春日井市では、ICTの活用を推進する学校に市内の教員が集まり、研修を行っている。研修の場となる学校の1つ、同市立出川小学校では、情報活用プロセスの意識づけにも力を入れ、ノートに「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」というシールを貼り、書く内容を整理している（写真）。そうしたノート作りは、研修を通して他校にも普及しつつあるという。